

-般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

http://nipponbolivia.org admin@nipponbolivia.org

042-673-3133



日本ボリビア協会会報誌

カントゥータ

Cantuta No.26

目 次

1.	ティワナクの謎・・・・・・・・・・大貫 良夫
2.	第3期に入ったモラレス政権・・・・・・・・・・・・・・ 勝美
3.	ペルーからアマゾンを下りボリビアへ・・・・・ 加藤 明子
4.	在日日系キャリア女性から見た日本の企業と社会・・・仁田原 幸
5.	日本のおけるボリビア Chagas 病の現況・・・・・三浦左千夫

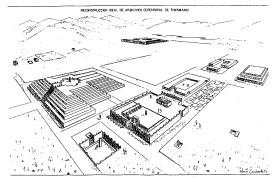
1. ティワナクの謎

日本ボリビア協会副会長・アンデス考古学者 大貫 良夫

ボリビアの観光名所の第1は古代都市ティワナ クである。もっとも最近はウユニ塩湖がたいへん な人気で、荒涼とした高原に道路が通じホテルま でできているという。それでもティワナクは世界 中の観光客をひきつけてやまない。

ティワナクはティティカカ湖の南岸近くに位置 して、標高 3800 メートルほどの高地にある。大 小の切石で作った石造建築、人物や動物を刻んだ 石彫、平野にそびえるような巨大な人工基壇など で昔から注目され、多くの研究者を呼び込んでき た遺跡である。またボリビアのみならず世界の大 きな博物館にはティワナク文化の土器が展示され ている。赤白黒黄そしてときに青などの多彩色の 土器もまた、優雅な形とともに見る人を魅了する。

ティワナク復元図



・イワナク遺跡の仮説的復元図(Escalante Mos

ティワナクの中心部復元図 図 1

首都ラパスから東のほうへ舗装道路を走って 2 時間足らず、世界遺産のティワナクに着く。すぐ に目につくのはアカパナという大建築である。と いっても今は石壁などがくずれてしまっているの で小山のように見える。しかしかつては底辺がお よそ 200 メートル四方、高さ 17 メートル、周囲 を7段の階段状の石壁で囲った大基壇で、頂上部 に広場や部屋を乗せていた。その北隣にあるのが 深さ2メートルの半地下神殿で、28.5 x 26メート

ルの広場があり、四面の壁には175個の人頭をか たどった石彫がはめ込まれ、広場中央には数本の 柱状の石彫が立つ。



写真 1 半地下神殿とカラササヤ東門

この広場の西側にはカラササヤという広い基壇 があり、巨石と小さい石を組み合わせた石壁が周 囲を固めている。東西 129 メートル、南北 119 メ ートル、高さおよそ4メートル、東壁の中央に入 り口があり、巨岩をすえて階段状に削り、そのさ きに立派な門を備えている。その奥は広い平地で あるが、昔は大小の建物などがあって、王宮のよ うなものであったらしい。高さ3メートル、人物 を刻んだ「ポンセの石柱」が立つ。そして遙か前 方、西北の隅近くに一枚岩を見事に加工した「太 陽の門」という石彫がある。ティワナクのシンボ ルともいえる石彫で、上部には細かい浮き彫り彫 刻があり、この解釈をめぐっては数多くの論考が あっていまだにどれがよいのか決定的なものはな 11



写真2 ポンセの石柱



写真3 太陽の門

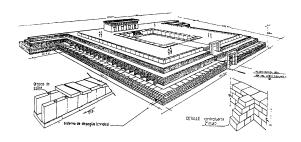
カラササヤ大基壇の西には未発掘の区域が広がり、建築が隠れていることは表面に見えている石の並び方からあきらかである。発掘が進めば思いがけない発見が続くことまちがいない。現に最近、アカパナの西側階段の根元からは、黒い石から作ったプーマ(ピューマ)の丸彫りが見つかった。そしてそのさらに先にプーマプンクという大基壇がある。155 x 132 メートル、高さおよそ 5 メートル、壮麗な建築を乗せていたという解釈がなされている。この近くには大小の切石が山積みになっており、ティワナクの建築技術を知る手がかりにもなっている。



写真4 アカパナの大基壇

大規模な公共的性格の建築と住民の住居などが集まっているので、ひとまずティワナクは都市とよべるであろうが、この都市はいつごろのものなのか。これまたたくさんの研究がなされてきたにも

プーマプンク復元図 Pumapunku



プマ・ブンクのピラミッドの仮説的復元図(Escalante Moscoso 1994)

図2 プーマプンク復元図

かかわらず、定説に至るものはない。最近では西暦の 400 年から 1100 年頃までの都市であろうと考えられている。しかしそれはどのような国家の都市であったのかとなるとこれまた異論続出となる。多民族を抱えた一大帝国であったというものから、独立したそこだけの都市国家という説まである。南ペルーで太平洋に注ぐモケグア谷からチリ北部、ボリビア東部からアルゼンチン北西部にかけてティワナクに類似した土器が見つかる。植民地もあろうし、影響下に入った地域であったかもしれない。いっぽうティワナクの支配者とおぼしき人物の墓は未発見で、社会組織にかかわる資料も少ない。

しかしながら、最近になって瞠目すべき墓地の発見があった。ティティカカ湖にあるパリティという小島の遺跡である。そこでの副葬品として際立っているのが色鮮やかな土器である。ティワナクの代表的なケーロ型のコップや人物坐像をかたどった壷、広口の鉢などのほかに、アヒルを抱いて座る老人を表現した細口の長頚壷などティワナク土器の専門家でもはじめて見るようなものがあった。よくぞ盗掘されずにいたものである。周囲の住民たちの努力で遺跡と遺物の保存が行われているので、今後さらなる研究によってティワナク文化の一部が明らかになってゆくことであろう。







写真6 パリティ島 出土の土器

ティワナクに関係してもうひとつアンデス文明 史における重大問題がある。それはペルー中央高 地に始まったといわれるワリ文化との関係である。 ペルー中部のアヤクチョ市に近いワリ遺跡がその 文化の中心であり、ワリ国家の首都であろうと目 される。ティワナク同様そこがどのような都市で あったのか、ワリは大帝国のような国家であった のか、これまた議論が絶えない問題である。ワリ は西暦 700 年から 1000 年頃に全盛期を持った文 化であるから、ティワナクと同時代であった期間 が数百年ある。そして厄介なことに、ワリにもティワナクの代表であるケーロ型コップがあり、ティワナクの太陽の門や土器に共通する図像表現や 模様が多くある。ではワリを作ったのはティワナ クかというとそう簡単にはゆかない。

ところがここにまたもや意外性にとんだ土器が 見つかった。今日のアヤクチョ空港に接してワリ 文化の始まりに近い時期の遺跡コンチョパタがあ る。そこから見つかった土器の描かれた絵に注目 が集まった。弓矢と盾を持って芦舟らしき舟に片 膝ついて前方を見る戦士の絵である。これはティ ティカカ湖を渡るティワナクの戦士であろうか。 この意味をめぐってまだまだ研究が続くことにな る。

この戦士の絵にはもうひとつ気になる点がある。 それは弓矢である。ペルーのアンデス文明では弓 矢がない。インカ帝国でも弓矢は使わず、アマゾ ン川上流の森林に住む住民を弓矢部隊として雇っ ていたという。ワリの土器にある戦士たちの弓矢 戦法は後の時代にあとを残さず消えてしまったの



写真7 コンチョパタ出土の土器の絵

であろうか。いっぽうティワナクの遺跡からは槍ではなく石の矢尻が多く見つかっている。しかしだからといってワリの絵がティワナクの戦士なのかどうか、もう少し詮索をしていったほうが良かろう。アヤクチョは東に行けばアマゾン川上流部で、その森林には弓矢を常用する住民がたくさんいたのである。

もうひとつ興味深い調査データがある。それは DNAの分析である。ティワナクを築いた人々は、 今日のボリビア国民を構成する民族のうち最大で あるアイマラ族の祖先たちだといわれる。しかし ティワナクで見つかった埋葬人骨の DNA はアイ マラ族にはつながらないらしい。むしろアマゾン 川流域の住民とのつながりが強いという。これを 先の弓矢と関連付ける議論も出てくるかもしれな いが、まずもって問題にすべきはそれらの人骨が ティワナク社会の中のどういう部分なのか、支配 者層か遠隔地からの訪問者または移住者なのか、 戦争の捕虜とか奴隷とか、そういう出自がはっき りしないと議論は前に進まない。

かくして多くの観光客を前にして世界遺産のテ

ィワナクは、まだまだ説明不足のことばかりであ る。ペルーでは日本人の研究者が大活躍をしてき ている。ボリビアの古代文化は意欲的な研究者を 待っている。 (2016·6·9 記)

2. 第3期に入ったモラレス政権の展望

サンフアン市前市長

2006年に発足したモラレス政権はボリビア 共和国独立(1825年)以来の短期間で憲法改 正、石油企業国有化、国営航空会社設立等の大き な改革を行い政治、社会、経済面で成果を上げた。 なかでも2005年と2012年を比較して貧困 率60,6%を43.4%まで下げ、さらに極度の 貧困率38.2%を21.6%まで下げることに成 功しておりこれらは国連のミレニアム開発目標の 一つである貧困の撲滅の中でも成果として高く評 価されるであろう。

また、この7年間で一人当たり国内総生産GD Pを1046.4米ドルから2645.3米ドルへ と引き上げたことについて国際通貨基金IMFも モラレス政権を評価している。このような大きな 成果を踏まえて2015年の総選挙に挑み、モラ レス政権を支える社会運動党(MAS 党)は6 1%の支持率を獲得し国会でも3分の2の議席を 保持して、政権は第3期目へと継続されることに なった。

本題に入る前に、エボ・モラレス大統領とアル バロ・ガルシア副大統領のコンビがなぜ再々選に 挑めたのかという疑問にお答えしておきたい。

2009年に施行された新憲法第186条によ ると「大統領と副大統領の任期は5年で再選は一 回のみ可能と示されている」。また同新憲法の臨時 条項第ⅠのⅡ条には、この新憲法施行以前の政権 任期についてはカウントされると明示されてある にも拘わらず、国会は憲法裁判所に憲法解釈を委 ね、裁判所は新憲法が施行された後の選挙をボリ ビア多民族国家の初回選挙とみなしたことから、 2014年の選挙が第1回目の再選挙と解釈され、 実質上第3期目の再々選、即ち3選が合法化され た。しかし、私はこの再々選はどうみても憲法違 反であったと今でも思っている。

実質2015年1月に第3期目に入ったモラレ ス政権の重要課題の一つが、以前から掲げていた チリとの国境問題であり、国交の断絶状態を解消 し「海への出口」を確保するための外交交渉の再 開をハーグ国際司法裁判所へ訴えてきた結果、同 年9月に提訴が認められ、一時モラレス政権の支 持率は最高点に達した。これをチャンスと見たM AS党は、私の憶測によれば時期尚早と分かって いながら新憲法のさらなる一部改正に乗り出し、 モラレス大統領とガルシア副大統領コンビの4選 を可能にするために、憲法第186条の改正につ いての賛否をとる国民投票を今年の2月21日に 強行した。その結果、政権側の疑わしい様々な裏 工作にも拘らずYESが48.7%、NOが51. 3%と敗北し、政権コンビにまさかのパンチが下 った状況に置かれている。

モラレス政権第3期目スタート早々、浮上した のが先住民基金に関する汚職、石油・天然ガス・ 鉱物など天然資源の国際価格の暴落による外貨収 入の減少、さらに国民投票の矢先に報道で暴露さ れた中国企業CAMCとボリビア政府間との契約 における職権濫用の疑い、など問題が続発してい る。また、CAMC社の営業マネージャーがモラ レス大統領の元愛人であることが判明し、さらに 彼女との間に子供が存在すると報道されて状況は 複雑化しており、この様な苦境からいかに脱出す るかが政権の当面の課題となっている。一方、M AS党内ではエボ・モラレスに替わる人物はいな いとされており、現在ではダビッド・チョケワン カ外務大臣が後継の有力候補として名前が挙がっ ているものの、一方では娘のエバリスの名も挙が っているが年齢が満たないなど、後継者選びは党 内では政権運営と並んで重要課題となっている。

一方、経済面では、これまで経済成長を続けて きたモラレス政権下で毎年の恒例として、今年も 5月1日 (メーデー) に発表された法令の一つが 労働賃金引き上げであり、最低労働賃金をこれまでの月額238米ドルから259米ドルへと実質9%アップして今年の一月に遡って支払うよう命じた。一般公務員の賃金値上げについては6%アップと定められたが、月額2,155米ドル以下の受給者のみに適用されるなどやや慎重な姿勢を見せている。一方、民間企業については労使双方の合意のもと6%を目安として交渉するよう定められた。また、2013年より経済成長率4.5%を上回ったとして毎年連続実行されてきているダブルボーナスの支給については、今年2016年もできるとアルセ経済・財政大臣は自信をもって述べており、エボノミクスの成果が試されることになるが、経済へのプラス・マイナス両面の影響は決して小さくは無いと思われる。

今後のテーマとしては次が考えられる。

- 1) 内閣改造をして、モラレス政権への信頼を取り戻すことが重要課題の一つになる。 MAS党は国会で3分の2議席を確保しているのでガバナンスには問題ないと思われるが、軍隊法・警察法の改正など重要法案がまだ残っているので、国会審議は今まで以上に慎重に進める必要があると思われる。
- 2) 国際司法裁判所の判決に基づき、今の政権任期内にチリとの「海への出口」問題についての交渉が開始できればモラレス政権は多少信頼と支持率を上げることはできると思われるが、国民感情のうえで海の問題が優先するか否かが問われるところであろう。
- 3) モラレス大統領は最近またもや憲法の一部改正について国民投票の再実施をほのめかしている。憲法を含め法律的に同じ件についての国民投票の繰返しは否定されていないとMAS党では弁護しているが、モラレス政権の政治的常識と理性が

問われる問題であり冷静な判断が望まれる。

最後に、私が見る今のボリビアと日本の関 係について敢えて言うなら、「悪くはないが 良くでもない」という状態にある。その理由 の一つにはモラレス大統領は、明らかな反米 反ヤンキーズ帝国派であり、内心はともかく その同盟国である日本と表向きには仲良くす ることができないと思われるからである。リ チウム開発などボリビアにとって日本の技術 を必要としていることは言うまでもなく、何 らかの歩み寄りが期待されているが、政治的 理由から簡単に日本と組む訳にはいかないの であろう。しかし、ボリビアと日本の間には 修好100年という永年に渡る友好関係の基 盤がシッカリと築かれており、この政権第3 期は日ボ両国間で相互に積極的に友好協力関 係を深めるべき時期かもしれない。

(2016·5·31 記)

3.ペルーからアマゾンを下りボリビアへ —初期日本人移住者の足跡を追って一

(ボリビア日本人移住 100 周年記念事業)

特定社会保険労務士・看護師

加藤 明子

私が大学生の時にペルー、ボリビアを訪れる機会を頂いた。この時の貴重な経験や、ペルー・ボリビアで出会った方たちから学んだことが私の人生を大きく変えたといっても過言ではない。もう15年以上も前のことになってしまうが、紹介させていただこうと思う。

1999年8月~9月上旬、私は『ボリビア日本人移民100周年記念事業』に参加した。この事業は、日本人移民がペルーからボリビアに入国して100周年を迎えたことを記念して、その当時駐日ボリビア大使であったエウドロ・ガリンド氏が「100年前に日本人移住者が辿った足跡を追う」ことを発案したことをきっかけに、横浜市立大学探検部の学生が主体となって計画・実行したものである。

中央大学商学部4年生だった私は、国本伊代先生 (現一般社団法人・日本ボリビア協会理事、中央 大学名誉教授)にお声かけを頂き、この計画に参 加させていただくことになった。

1999 年 8 月 2 日、私たちはラパス隊とリマ隊 の2手にわかれて日本を出発し、ボリビアとペル ーに向かった。それぞれの地に到着後、ラパス隊 はインカ道のトレッキングを開始し、リマ隊は2 ~3 週間にわたる手漕ぎボートによる河下りに向 けて、物品の準備等を始めた。私はリマ隊に所属 し、リマでの買い出しや日本人協会等の関係団体 への表敬訪問、日本から運んだ2人乗りの組み立 て式カヌーの点検や操縦訓練などに従事した。

8月15日、ペルーの南東部にある都市、プエル トマルドナードを出発し、国境を越えて、600 k m離れたボリビアの北部に位置するベニ県のリベ ラルタに向けて河下りが始まった。構成メンバー は、日本人チーム14人(学生12人、社会人2人、 うち男性8人、女性6人)と駐日ボリビア大使と 海軍の将兵を中心としたボリビア人チームの合同 チームだ。日本で私が読んだアマゾン・マードレ・ デ・ディオス川について書かれた書籍には、「ワニ の数が多くなった」「ピラニアなどの肉食魚が人 に食らいついて肉を食いちぎる」などといった身 も縮むような話が載っており、果たしてこんな危 険な川を手漕ぎカヌーで下ることができるのだろ うか危惧していたが、実際に目にした川では、ワ ニはほとんどおらず、ピラニアに遭遇することも なかった。また乾季のため水が少なく、流れはと ても穏やかであったが、日本の川とは異なり、水 面から 10cm ほど手を入れただけで手が見えなく なるほど、透明度は低かった。

ボリビアはペルー、ブラジル, パラグアイ、ア ルゼンチン、チリと5か国に囲まれ海への出口を 持たない内陸国でだが、ペルー、ブラジル、パラ グアイとは、チチカカ湖や多くの河川が国境をな しており、また、国内の河川がかつては重要な交 通路であったことからその治安を守るために海軍 を持っている。

朝起きて朝食を食べたあと2人乗りのカヌーを 漕ぎ、昼になると岸にあがり、昼食と2時間程度 の休憩を取った後、再びカヌーを漕ぎ、夕方にな る前に川辺にテントを張り、夕食を食べてから寝 る。こうして一日約50km ずつを着実に進んでい った。

日本人メンバー、ボリビア海軍のメンバーは、 言葉の違いからなかなか打ち解けることができな かったが、同じ目的地を目指し、カヌーを漕ぎ寝 食を共にする日々を過ごす中で、言葉の壁を越え て連帯意識を持つようになり、カヌー下りの終盤 においては、一緒に歌を歌ったり、掛け声をかけ 合い励まし合いながら、カヌーを漕ぎ続けた。横 浜市立大学の探検部のメンバーが事前に多くの下 調べや連絡調整、物品準備をしてくれていたこと、 ボリビア海軍が参加し安全面の確保がされていた こと、海軍の巡視艇が母船として付添い、朝食と 夕食をボリビア人の料理人が準備してくれたこと など、大変恵まれた体制であった。

一方、大量の蚊に日本人メンバーの全員が随分 悩まされた。日本のヤブ蚊のような蚊のほか、ブ ヨのような蚊も大量におり、嫌悪を感じない者は いなかった。虫よけスプレーを使用しても、膨大 な数の蚊には歯が立たず、日本人のメンバーのほ とんどは長袖、長ズボン、帽子、首にはタオルを 巻き、肌が隠れるようにしていた。それが裏目に 出たのか、疲れのためか、私は13日目に熱中症 のため倒れてしまい、母船で休むことになってし まった。

プエルトマルドナードを出発して 17 日目の 8 月 31 日に目的地リベラルタに到着した。リベラ ルタではゴール地点の川辺には地元の日系人の 方々をはじめとした多くの人が集まり、盛大な歓 迎式典を催してくれた。私たちは感動で胸がいっ ぱいになった。

カヌーの行程を終えたあと、ボリビア海軍と別 れた私たち日本人メンバーは、リベラルタ、サン タクルス、オキナワ移住地、サンファン移住地に 住む日系人、日本人の方々のもとを訪れた。そこ

では多くの方々の多くのもてなしや温かい心遣いに触れ、また、戦前・戦後の移住者の方々の歴史について伺うことができた。夢を抱いて日本を出発したものの、様々な問題に直面して、次々と新たな土地へ移動しなくてはいけなかったこと、私たちとは異なり十分な装備もないまま川下りをしなければならなかったこと、のこぎりなどの限られた器具を使い、うっそうとした広大なジャングルを開墾し農地や牧草地を開拓して農牧業を興したこと、農地を繋ぐ何百kmにも及ぶ道路や、町の中心部に市役所や広場、街路、教会等の公共施設を建設したことなどを知り、想像を絶する苦難やご苦労を想像するとともに、人間の偉大な力や可能性について深く感じずにはいられなかった。

後日、横浜市立大学探検部がまとめた『ボリビア日本人移民 100 周年記念アマゾン・マードレ・デ・ディオス川追跡調査報告書』では、ほとんどのメンバーが日系人、日本人の方々との交流を報告していた。それだけ日系人、日本人の方々が、心の残る多くのことを私たちに教えて下さったということなのだろう。

探検隊のリーダーであった横浜市立大学探検部の片平吉秀君は、報告書の冒頭で「人は人に支えられてこそ、何か大きなことを成し遂げられる」と記載している。多くの人に支えられ、無事にこの初期ボリビア移住者の足跡を追う事業計画を遂行できたが、学校を卒業し、社会人として仕事やプロジェクトに取り組む際に、改めて人と人が支え合うことの重要性を毎回のように実感する。また、仕事や家庭で困難な事柄にぶつかるたびに、ボリビアで出会った方々から伺った話や辛かったことを乗り越えた体験を思い起こす。1999年のあの夏の日以来、まだボリビアを訪れることはできていないが、いつの日かまた、多くのことを教えてくれたボリビアの大地を訪れてみたいと考えている。(2016・6・7記)



写真8 早朝のアマゾン・マードレ・デ・リオス川を下るチームー行

4. 在日日系キャリア女性から見た日本の企業と社会

(株)安藤・間 国際事業本部管理部 (サンファン移住地出身)

仁田原 幸

新緑が眩しい季節となり、過ごしやすい陽気と なりました。私はサンフアン移住地で生まれ育ち ました日系二世で、日本に住み始めて3年目を迎 えます仁田原幸(にたばるさち)と申します。遠 く離れていても母国ボリビアと繋がっていたいと の思いから、日本ボリビア協会の会員となり、こ の度寄稿する機会をいただいた次第でございます。 私は、現在、東京に本社を置くゼネコン、株式会 社 安藤・間(はざま)の国際事業本部管理部で、 主計業務の傍ら、中南米エリア及びベトナム国の 担当として、ホンジュラス、パラグアイ、ニカラ グアの土木工事現場や、ベトナム営業所への出張 等に携わっています。こうやって日本の企業で言 葉に不自由することなく働くことができるのも、 両親をはじめ、移住初期の頃から日本語の教育に 熱心に取り組まれた一世の方々のおかげと心より 感謝しています。

仁田原家の5人姉妹の長女として、幼い頃から4人の妹たちと一緒に裏庭の林の中で遊び、野うさぎを捕まえたり、小川で魚を獲ったり、おやつは木の幹に座ってマンゴーを食べ、暑い日は牛の水飲み場で水遊びをするなど、お人形遊びとは無縁な男の子のような幼少時代を過ごしてきました。

お転婆娘たちが唯一おとなしく過ごしていたのは、 寝る前に、日本昔話のカセットテープを聞かせて もらえるときと、当時、父の勤め先である農協に おられた菊野先生(JICAの専門家)からいた だいた、国語と算数のドリルに競って取り組んで いるときでした。また、毎月届く日本の「こども しんぶん」を読む事や、日本の歌を歌って聞かせ てくれた母によって、私たちにとっては日本語が 母国語となりました。

初めて日本を訪れたのは中学を卒業した年で、 JICAの研修がきっかけでした。横浜の根岸に あったセンターに滞在し、初めて舞い降りてくる 雪に感動し、初めての地震に驚き、1週間体験入 学をした根岸中学校では上履きのまま帰ったこと や、塀を乗り越えて先生に叱られたこと等、今で も鮮明に覚えております。

コチャバンバの高校を卒業後、移住地の農協(C AISY)に就職し、成人の年に福岡県県費留学 生として北九州市の九州経理専門学校(現在は九 州テクノカレッジ) に入学し、初めての一人暮ら しのなか、日本人のクラスメイトと同等に試験を 受けて無事に卒業できたことは私に大きな自信を 与えてくれました。

当時の移住地では、女子の大学進学率がまだ低 く、20代前半で結婚をして家庭を持つことが一 般的でしたが、私はみんなが歩む道ではなく、自 分の道を自分で切り拓いていきたいと強く思うよ うになり、研修が終わって移住地に戻ってからは 「外に出る」ことを考えるようになりました。そ こには、9人の子供の母親でありながら、日本語 の教師として長年勤めてきた母方の祖母春子おば あちゃんと、移住して間も無く未亡人となりなが らも、お産婆さんとして移住地の後継者となる新 しい命の誕生に貢献してきた父方の祖母スミエお ばあちゃんの存在も大きく、女性の選択肢が主婦 になることだけではないことを身近に感じ育った 影響が強かったのかもしれません。好奇心旺盛で 頑固な私の性格を知ってか、父から「結婚もいい けど、勉強も仕事も続けることは大事だ。外に出 なさい。自分で決めたことは最後までしっかりや りなさい。」と背中を押してくれました。

移住地を後にした私の人生行路は、サンタクル ス市日本人会での事務と日本語教師として始まり、 数年後、叔父の紹介で日本のゼネコン会社の世界 に入りました。エルサルバドルからスタートして、 ボリビア、グアテマラ、ガイアナ、ガーナ、パラ グアイで主にODA案件のプロジェクトで通訳兼 事務担当として貴重な経験を積み重ねてきました。 初めての国の空港に降り立つ瞬間は、その地の風 と土の香りに包まれるたびに心が躍り、道行く 人々や町並み、道路脇の木々や花々、何もかもが 新鮮で、人種や言葉、文化や習慣の違いまで、五 感で感じ取れるすべてが私のエネルギーとなりま した。白いご飯に味噌汁、納豆に豆腐と日本食材 が毎日食卓にあった移住地の生活から出ることで、 これまでの私の中での当り前が見事に根底から覆 されましたが、驚きよりも新しい発見に対しての 喜びが遙かに勝りました。日本政府の援助の仕組 みを知り、道路や水路ができ、蛇口からきれいな 水が出るようになり、工事が完成したときに地元 の方たちから「ありがとう」とお礼を言われた瞬 間の感動は一生の宝物となり何物にも替えられま せん。

勿論、失敗も多々ありましたし、僻地での不便 な環境での生活や男社会の中で働くことは決して 楽だとは言い切れません。女でなければと悔しい 思いをしたことも幾度となくあります。仕事で評 価されるのではなく性的な「モノ」と見なされ、 権力を行使したセクハラ、取引先との接待の強要、 意見をすると「女のくせに生意気だ」と言われ、 無視をされたりクビにすると脅されたり、時には 怒鳴り合いの喧嘩もありました。「女はさっさと 仕事を辞めて結婚して子供を産んだら」と暴言を 吐かれたこともあります。ジェンダー(男女の社 会的性差)の平等とは、女性にも男性と同様に、 尊厳を持ち自由に生きる権利があるということで はないでしょうか。子供は女性なら必ずしも産め るとは限りません。不公平と言うより無神経な言 動に泣いた日もありましたが、辛いときには故郷 サンフアンの澄んだ青空と、手を伸ばせば届きそ うな冬の星空を思い出し励みとしてきました。西 アフリカのガーナ滞在中に私の良き理解者であっ た父は他界しましたが、妹たちが結婚し姪っ子6 人と甥っ子1人(この夏に姪っ子が更に2人増え る予定)の大家族となった今では、彼らの成長ぶ りを楽しむことが叔母としての特権であり、家族 の愛情が何よりも心強い支えです。

これまで、サンフアン移住地で育った私は、古 き良き日本の慣習を受け継いだ日本人だと自負し ていたほどでしたが、いざ日本で暮らし働いてみ ると周りと違うということを感じるようになりま した。通勤の満員電車の中で赤の他人に挟まれて いることの居心地の悪さ、どんな狭い場所でも必 死に携帯やスマートフォンを覗き込む人々の姿は 異様としか思えず、日本語はせっかく美しい言語 であるのに略語やカタカナ語が多く使われている ことの不自然さや、就職活動は制服のように全員 同じ服装で、職場では残業するほど仕事ができる とみられること、職場の人に迷惑がかかるから有 給は取得できないといった働き方については、私 には理解が難しく、機会があれば上司や同僚と議 論を重ねているのですが、これにはまだ当分時間 がかかりそうです。大都会東京を流れる人の川も、 満員電車にもまだ慣れることはできません。野菜 と果物の値段がとても高いことにまだまだ文句が 出てしまいます。これだけ多国籍の人が住む現代 においてヘイトスピーチが行われていること、テ レビをつければ容姿や体型を笑いにしていること は、私の目には時代遅れの人種差別のように映り ます。また、「女性の活用」という言葉を初めて耳 にしたときにはとても驚きました。女性のエンパ ワーメント原則 (WEPs: Women's Empowerment Principles) の活用のことだと思 うのですが、どうも「オトコ」の上から目線的な 響きがして納得がいきません。男社会である企業 のなかでは、男女間の賃金格差、育児や家庭との 両立が難しい労働環境、教育不足等、女性が管理

職に就くための土台がまだ固まっていない現状で、 果たして、政府が掲げる目標割合を達成するため だけに数を増やすことが良いことなのか疑問に感 じます。

然しながら日本はやはり素敵な国です。春の桜、 夏の紫陽花、秋の紅葉、冬の雪景色と四季折々の 自然の豊かな美しさを堪能することができ、食べ 物も季節毎に楽しむことができます。私が日本を 拠点にしようと決めたのは、女性がひとりで安全 に生活でき、好きな仕事を続けることができる国 だからなのです。職場では、素晴らしい上司、公 私ともに信頼のおける同僚、家族と離れて暮らす 私を心配してくれる自称「日本のお父さん」がた くさんいて、人間関係にとても恵まれた環境にあ ります。昇格のため勉強をする機会もいただき、 一進一退ではありますが二十歳のときに決断した 自分の道を確実に歩んでおり、それを誰よりも喜 んでくれているのが母であることが、私の一番の 幸せでもあります。

ふとしたことから自分は日本人とは違うと気付 かされたときはショックでしたが、ボリビアの密 林を開拓し今日の立派な移住地を築いた先駆者の 魂を受継ぐ日系人として誇りを持ち、不易流行の 精神で、世界のどんな場所に置かれても両国の良 さを伝えることができる人間であることをシッカ リと心がけて行きたいと思っております。 (2016·6·10 記)

5. 日本におけるボリビア Chagas 病の現況 NPO法人 MAIKEN 東京医学技術専門学校特任講師 元慶應義塾大学医学部熱帯医学寄生虫学教室 三浦 左千夫

今から62年前の1954年8~9月にかけて、日 本から丁度地球の反対側に当るボリビア国サンタ クルス県の「うるま植民地」へ、琉球政府により 戦後第1次計画移民として募集され送り出された 400 余名が到着した。それから 50 年後、私も南 米特有の風土病シャーガス病の研究調査のために、

今日の OKINAWA 移住地に度々足を運ぶことに なった。そんなある日、オキナワ診療所の書棚で 見つけた移住地の変遷について記した本の中に「 うるま病」の名があった。それは、かつての移民 第一陣が、うるま植民地入植当時に経験した忌ま わしい原因不明の熱病のことであった。この病気 のために15名の方々が亡くなり、うるま植民地 はつかの間の移住地となり、西方のパロメティー ヤに移転を余儀なくされ、その後、現在の

OKINAWA 移住地に落ち着くことになった。入植 地を変更しなければならないほどの忌まわしい熱 病とはどんなものであったのだろうかは、

KAIGAI IJU (海外移住) 614 号 2004 年—JICA を参照していただきたいが、現在はその熱病を知 る人は少なく、一方マラリアに翻弄された苦労話 は良く耳にする。そして、さらにボリビアにはシ ャーガス病 (Mal de Chaga) と言われる厄介な風 土病が存在していた。

この風土病は吸血昆虫サシガメ(Vinchuca)に よって媒介され、感染をすると循環器系(心筋)、 消化器系(食道・結腸など)に障害を来たし、更 に慢性感染の母親からは時として胎児に病原体 Trypanosoma cruzi(T.cruzi)が移行し、先天性感 染をも引き起こす病気である。そのため、在日ボ リビア人家族の日本で生まれた子供にも先天性感 染者が発見された。このケースでは幸いにして自 覚症状を呈する前に、コミュニティ―で行った健 康相談会で母親の感染が判り、日本生まれのその 子供についても検査を行った結果、先天性感染が 確認されて治療を行い現在もなお観察中であるが 経過は良好である。

このシャーガス病は、たとえ感染者であっても、 自覚症状が出る前に対処することで、不幸な発症 に至らずに済むことが多い。

病原体である T.cruzi に汚染された Vinchuca は吸血時に皮膚表面に脱糞するが、その上を無意 識のうちに手で掻くことによって、糞中に棲息す る病原体を皮膚下に掻き込んでしまうことで多く は感染する。最近では、サシガメの糞に汚染され

た果物などを摂っての経口感染も報告されるよう になった。一度病原体が体の中に侵入すると血流 と共に体中に運ばれ、心筋、食道、腸管の細胞内 で分裂増殖を繰り返すようになる。

Trypanosoma cruzi & Chagas disease クルーズ・トリパノソーマとシャーガス病



写真9: T.cruzi 感染概略

その間に併行して血液中に虫体が出て来ては新た な細胞へ運ばれて感染を繰り返し、感染後20~ 30年と長い年月を重ねた後に発症することが多 いという厄介な病気である。

シャーガス病

- · 潜伏期1~3W
- 急性期(虫血症)
- 緩急期(無症状)
- 慢性期

megasyndrome 心室拡張症 巨大食道、巨大結腸症など

> ECG 異常 CRBBB.etc



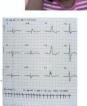






写真10:シャーガス病、病期病形

1990年以降、日系外国人に対する就労条件 が緩和され、南米各地より日系移民家族が大挙来 日して定住するようになって早や20年以上が経 過する。ボリビアからも多くの日系家族が来日し 定住化しているが、沖縄県では帰国した移民も多 い。最もシャーガス病が多いサンタクルス県には オキナワとサンファンの二つの入植地があり、サ ンファンに比べオキナワの方がはるかに感染者は 多いが、その理由はオキナワ入植地にはサシガメ が多く生息するためである。ベニ県からサンタク

ルス県に移住した結果シャーガス病に感染した者 も少なくない。オキナワ入植地での疫学調査をし た折に「朝起きた時に蚊帳の中に血を吸った大き なゴキブリのような虫がたくさんいたのを覚えて いる」「あれが Vinchuca?」と尋ねられたことが マラリアについては移住前に注意が喚起 ある。 され、寝る時には蚊帳を吊るようにと、蚊帳持参 で入植した家族は多かったが Vinchuca が媒介す るシャーガス病を知る人は当時少なかった。入植 者の多くはブラジル・サントス港に上陸しブラジ ル国内を移動して、遠路はるばるオキナワ入植地 と、サンファン入植地に辿り着いた。その経路上 に Vinchuca の生息地が在ったことが災いし、多 くの入植者が知らないうちに感染してしまったよ うだ。最近になって明らかになってきたのは、 Vinchuca の新鮮な糞中に存在する病原体 T.cruzi は充分に感染性をもっているので、Vinchuca に 吸血されずとも皮膚の傷などから感染する可能で あったと思われる。

明るい未来に夢を抱き、新天地へと入植した移 民一世にとっては、期待と現実とのギャップに困 惑をし、そのためか日系移住者はシャーガス病を 隠す傾向にあった。それは南米人一般の傾向でも あるが、シャーガス病は当地では貧困の象徴のよ うに思われており、病気の実態をよく知る由もな かったからだろう。調査中によく聞いた話は「イ ンディオ・ボリビア人の家には Vinchuca は居る けれど、日系人の家には綺麗好きだから居ない」 というものだった。しかし現地でボリビア人+日 系人=80名についてシャーガス病の感染の有無 について抗体検査を実施した結果では、感染者は 24.5%と極めて高率であった。そのうち血液中に 病原体の存在を推定される者は 13.5%, 更にサン タクルスの血液銀行での献血者の 35%が抗体陽 性との報告もあったが、現在はかなり低下してい るはずである。サンタクルス市にある保健省の中 央研究所 CENETROP での検査診断、経過観察を 行うための Chagas 病外来が最近になって閉鎖さ れてしまったとの報告があるのは残念でならない。

サンタクルス県では、農村の住民の多くは生活 向上のため、都会のサンタクルス市へと移住する 傾向がある。出生地を離れて都市に移住し生活を 始めた大学新入生についてシャーガス病の感染の 有無を検査したところその約半数が感染者である ことが報告された。これらの現象は本疾患の小規 模な移動であるが、都市部での献血、輸血感染の 危険が増したことは言うまでも無い。このような 居住環境から 1990 年代に入って大挙して日本へ の出稼ぎと呼ばれる就労移住が始まり、最大時に は37万人を超える在日ラテンアメリカ人社会が 築かれた。そのうちボリビア人の年齢構成を調べ てみると、シャーガス病の感染リスクを抱えてい る30歳以上が3000名を超え、多くは定住化 していると推定される。一方、日本全国各地に散 在するボリビア人コミュニティーからの情報収集 は極めて困難なため、各地の医療機関から相談を 纏めて感染の有無を集計した結果、1995~2 011年までにシャーガス病と診断され経過観察 を実施したものが5名(男=4、女=1)であっ た。国内疫学調査では、唯一神奈川県秦野市・平 塚市のボリビア日系社会で、2011~12年に 18名を検査することが出来た。その時の結果を 下記に示す。

Anticorpo-T.cruzi positivos no comunidade de Bolivia no Hatano 2012

国別	年齢	性別	滞在期間	母国での検 査の有無	備考
ボリビア	43	女性	8年	なし	母国で輸血 兄弟にChagas 病あり
ボリビア**	45	女性	15年	あり 抗体+	兄弟にChagas 病あり
ボリビア	34	女性	4年	サシガメに 刺された 抗体+	兄弟にChagas 病あり
日本 * * [ボリビア]	12	男性	12年	日本生まれ	母子感染を示 唆
ブラジル	55	女性	16年	あり 抗体+	有症 不整脈

図3 神奈川県秦野市平塚市での検査結果 2012

在日歴15年の45歳女性の感染者が見つかり、 医療機関へと紹介して以後心臓のケアーをうけて 現在なお経過観察中である。同時に母親であった ためその子に対する抗体検査も行った結果、日本 生まれの先天性感染であることが判明した。既に

12歳であったが、ボリビアの医療基準(15歳 未満の子供に関しては特別の治療を行う) に準じ て日本国内初のベンゾニダゾ―ルによる治療を実 施して著効を得ており、現在も経過観察中である。

このようにシャーガス病は早期発見で発症予防 が出来る感染症である。わが国ではシャーガス病 に対する認識が希薄なため一般の医療機関で簡単 に対処できるものではないが、患者と病院の双方 がシャーガス病についての予備知識を持って病院 で受診をすれば、可能な限りの対処療法を受ける ことが出来る。また献血や出産による二次感染防 止のためにも、在日ボリビア人や日系人帰国者の 方々は機会あるごとに血液検査を受けることが望 ましい。

シャーガス病感染の検査などは、毎週木曜日に 東京・五反田にある在日ブラジル領事館3F(東 京都品川区東五反田 1-13-12、COI 五反田ビル 内)にて、NPO法人 MAIKEN が行っており、 スペイン語で受診ができるので感染・発病の不安 をお持ちの方は是非積極的に相談されることをお 勧めする。

NPO 法人 MAIKEN の連絡先、

 $090 \ \ \text{--} \ \ 2566 \ \ \text{--} \ \ 6485 \ \ \text{--} \ \ 042\text{-}663\text{-}2104$ office admin@maikenbrasil.com

 $(2016 \cdot 6 \cdot 7 記)$

ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

- 1 [Los japoneses en Bolivia] 2013-9 100ños de historia de la inmigración japonesa en Bolivia 2 を原典として 2012 年までを追補 在庫多数
- ② 『ボリビアに生きる』2000-3 日本人ボリビア移住 100 周年誌 在庫1冊
- ③ 『大地に生きる沖縄移民』2005-12 コロニア・オキナワ入植50周年記念誌 2016:12 入庫予定
- ④ 『拓け行く友好の懸け橋』2005-12

社団法人日本ボリビア協会 http://nipponbolivia.org/

サンファン日本人移住地入植50周年 記念誌 在庫1冊

- ⑤ 『ともに50年そして未来へ』2006-12 サンタクルス中央日本人会50周年記念誌 在庫1冊
- ⑥ 『ラパス日本人会 90 年の記録 **1922–2012** J 2012–10. 2016-12 入庫予定
- **『ギュンターの冬』2016・7** (7) パラグアイのストロエスネル独裁政権時代を 描いた異色のミステリー政治小説 在庫多数

統一価格①—⑦共 2500 円 (税送料込) ご注文は当協会まで、下記へメール又は 電話で、お名前、ご住所、電話#、 書籍名、冊数をご連絡ください。

admin@nipponbolivia.org

042-673-3133

御支払は銀行振込でお願い致します。 (口座#, 名義人は発送時に連絡します)

編集後記

予定から2か月遅れましたが26号をお届 けします。今回も歴史、文化、政治、社 会、保健など様々な分野の寄稿を頂きま した。執筆者の皆様へ厚く感謝致します。

会員の皆様には、読まれたうえでの ご感想などをお寄せ頂けると幸いです。 編集担当

白川光徳、細萱恵子、杉浦 篤

平成 27 年度 (2015) 事業報告 (平成 27・4・1~平成 28・3・31)

I. 一般社団法人に移行して第2年度に当る平成 27年度は、日本・ボリビア両国間の国際交流を通 じて、両国間の相互理解と友好親善協力の関係を より一層発展・進化させることを目指し、公益目 的財産(期首 2,006,638 円=一般社団法人移行初 年度継承資産・2,480,870 円一前年度消化 474,232 円)の積極的活用を図りつつ、下記の活動を展開・ 推進した。

Ⅱ. 具体的事業・活動

1. 自主企画イベント

毎年恒例となっている X'Mas イベントを12月 2日に開催。副会長・大貫良夫氏のティワナク文 化についての講演、引き続いて会員・ルイスカル ロス・セヴェリッチ氏のグループ Los Tres Amigos のフォルクローレ演奏及び参加者交流会 を非会員にもオープンにして実施した。駐日ボリ ビア大使、ラ米関係団体、会員等約50名が参加 し盛会であった。

2. 会報 Cantuta の発行

24号(8月)、25号(3月)と二回発行した。内 容の充実と多様性のため幅広く執筆者を募り、ま た読者の読みやすさ向上のため紙質の改善を図っ た。

3. ホームページ (HP)

新しいお知らせ等頻繁に追記或いは更新すべきペ ージの内容の追加・更新・修正を、その都度、外 部専門業者に依頼することなく、協会独自ででき るようにするため、執行部の会員数名を対象に内 部研修会を行い、運用面の改善を図った。

HPサイトの内容見直しを継続中である。また、 2013年10月刊行のLos japoneses en Boliviaの 宣伝 P R を引き続き掲載し、現在 110 冊を販売済 みである。

- 4. 駐日ボリビア大使館との連携による広報及び 協力活動
- ①駐日ボリビア大使館からの要請を受けて、8月 6日の独立記念日にJapan Times に祝賀広告を出

稿するともに、会長名による当協会活動について の記事を寄稿した。

②2016年3月23日に東京・品川の港南公園で行 われたボリビア「海の日」のイベントに参加した。 ③エリック・サアベドラ駐日ボリビア大使が 12

月末に離任され、送別会を催した。

なお、ほぼ同じ時期に、駐ボリビア日本大使が、 椿秀洋氏から古賀京子氏へ交替され、協会として 新旧両大使に挨拶の機会があった。(その後椿前 大使は当協会へ入会された)

5. 各種団体・グループの活動への協力、参加 ①9月、日本のフォルクローレ音楽グループ "TierraCuatro" のボリビアの "Festijazz コン サートツアー"への参加(ラパス、コチャバンバ、 タリハ、エル・アルト、サンタクルス)及びサンフ アン日本人移住地での自主公演への支援。

事前の準備から現地での各種調整、自主公演への 資金援助等を含め全面的に支援して実現させた (杉浦専務理事が全日程に経費自己負担で同行)。 ②10月31日~11月1日には三重県津市と東京・ 市ヶ谷で開催された在日ボリビア人団体の主催の EXPO 2015 に後援するとともに参加した。

- ③ラテンアメリカ協会との連絡・協議:ラテンア メリカ協会主催の講演会を中心とする各種イベン ト並びに、ほぼ毎月開催のラ米関係団体参加の連 絡会に参加した。
- ④10月、ラテンアメリカ駐日大使夫人会主催チャ リティーバザー (駐日ボリビア大使館も出店) に 参加。
- ⑤日赤系 Maiken による Chagas 病検診(5月、 12月) への協力。
- ⑥その他、在日ボリビア人舞踊家ゼノビア・ママ ニ氏主催イベント(12月)、日本人フォルクロー レグループ Cantati コンサート (12月) 等への参 加
- 6. 在ボリビア日系人社会との交流促進 ①8月15日~20日の間、サンファン移住地の入 植 60 周年記念祭典の一連の行事に代表が参加し た(杉浦専務理事が経費自己負担で参加)。

②5 月、ボリビア日系協会連合会の佐藤信壽事務 局長が来日した際、理事会に招き現地事情につい て話を聞くとともに、学校建設プロジェクトに関 連して日本国内の学校視察をする際に杉浦専務理 事が同行した。

③7月から9月にかけボリビア訪問の際、ラパス、 サンタクルス、コチャバンバ、オキナワ、サンフ アン各地の日系団体幹部を訪問し意見交換した。 (杉浦専務理事)。

④10月、海外日系人協会主催の海外日系人大会に 参加し来日した移住者日系人と交歓。

7. 外部からの照会、要請への対応・協力 網走市の豆問屋長谷川商店のボリビア市場調査 (5月)、網走南ヶ丘高校への教材提供(5月)、 島根県大田市とポトシ市との銀鉱山同志の交流の ための調査(7月と2月)、ボリビア国際中学高校 創設プロジェクト関係事前調査(5月)国本伊代氏 『ラテンアメリカン社会と女性』(日本語版)(4月 、3月)、兒島峰氏『アンデスの都市祭礼』(スペイ ン語版)(8月)、パラグアイ作家マルコス氏『ギュ ンターの冬』(日本語版)(4月-3月)の出版、在 日ボリビア人ビジネスマン・ガリソン氏の日ボ間輸 出入貿易(10月~3月)、横浜中小製造MKR主催 イベント横浜NOW[世界コマ大戦]へのボリビア 人若者 2 名の参加、ボリビア人鉱山技術者ブスティ ージョス氏のボリビア鉄鉱山調査、神戸在住土肥次 郎氏主催ボリビア技術協力会が支援する建機 MKR Kobelco 社のボリビア進出(4月~3月)、日本の TV局ボリビア取材(数局)、日本人・在日ボリビ ア人個人や旅行代理店へのボリビア旅行関係観光・ 査証情報提供(4月~3月)、沖縄ボリビア協会主 催チャリティゴルフ大会・那覇(2月)、㈱日本 エイト技術開発によるボリビア日系人社会向温泉 事業F/S調査(3月)など。

平成 28 年度事業計画

(平成28年4月1日~平成29年3月31日)

I 基本方針 会員増加活動の継続・強化・促進 昨年度に引続き、日本とボリビア両国間の交 を通じて、相互理解と友好親善協力の関係をよ り一層発展・進化させることを目指し、会員各 位や関係先からの協力も得て、本年も昨年に引 続き、役員全員で努力を積み重ねて行く。

当 2015 年度末の会員総数は、79 名(個人会員

71 名、法人維持会員8名)と前年度末比較で10 名減となった。(個人会員8名減、法人維持会員2 名減)、これを受けて、本年度は 90 名への回復 を目標とする。 会員加入の重点対象として、従 来からの日本人の女性・若者・シニア層に移住帰 国者を加え、本年度はさらに、在日ボリビア大使 館とも連携して、在日ボリビア人・ラテンアメリ カ人のネットワークの現状把握を積極的に進め会 員加入を働き掛けることとする。この方針に沿っ て、自主イベントも一層充実させ、会報やホーム ページも整備充実するとともに、ラテンアメリカ 関係組織・団体との交流を深めて日常的繋がりを 生みだすキッカケ創りを活発化し、積極的に参加 を勧誘して、会員加入の増加へ繋げて行く。

Ⅱ 具体的事業活動

① 自主企画イベントの充実

参加して「楽しい、面白い」と感じて貰えるよう なエンターテインメント系としての従来のボリビ ア関係「音楽・ダンス・料理・食材」を主とした X'Mas イベントに加えて、「為になる」教養系の イベントとして、本年8月6日のボリビア独立記 念日を目途に、ボリビアを含むアンデス関係の、 「考古学、遺跡、現代史、小説・詩文・映画・絵 画」などの文化ジャンルでのイベントを新たに1 ~2件追加企画することとし、予算として 60 万 円を計上する。

また、自主イベントと連動しての、ボリビア訪問 旅行、文化・スポーツ活動などを企画し、維持会 員の旅行代理店2社と協賛か共催の形でタイアッ プして、参加者の集客に協力することを検討する。

② 会報 Cantuta の充実

発行回数をこれまでの年平均2回から、3~4回に 増やすとともに、スペイン語による寄稿記事を 新たに掲載することとし、併せて表紙を含めたデ ザインについて、斬新性を加えて会員などからの 好感度アップを目指して予算10万円を計上する。 なお、発行回数の増加については役員や事務局の 増員が必要であり、その実現性の検討結果をみつ つ実施することとする。

③ ホームページ (HP) などの充実

現在の更新頻度を月1回程度に引き上げることを 目指して、業者委託部分と協会内部での役員と事 務局による内部作業部分を明確に区分する。。

また、会員・非会員を合わせて外部からのボリビ アに関する情報収集のニーズに幅広く応え、同時 に協会側からも情報発信をタイムリーに広く効果 的に行えるようにするために、協会の情報サイト としてHPに加えてFacebookやLineの導入を検 討することとする。上記の実現を目指して予算と して10万円を計上する。

④ 駐日ボリビア大使館との連携によるボリビア 情報提供体制の充実、並びに在日ボリビア人ネッ トワーク創りへの協力

駐日ボリビア大使館と連携して、ボリビアに興 味・関心を持つ日本人一般層へのボリビア文化・ 産品・観光情報の提供、並びに日本の地方・中小 企業向のボリビア関係ビジネス情報の提供を進め ると共に、在日のボリビア人や、ボリビア移住帰 国者の集住地域を、共に訪問してネットワークの 整備に協力する。併せて、Chagas 病の感染防止 と治療のために、日赤の検査技師・三浦左千夫氏 が行う在日ボリビア人集住地への訪問集団検診に 協力する。交通費を増額して8万円を計上する。

⑤ ボリビアを含むラテンアメリカ関係組織・団 体との連携充実

下記の外部組織・団体の主催するセミナー・イベ ントへ積極的に参加して、ボリビア関係情報の積 極的提供を行うと共に、先方からのボリビアを含 むラテンアメリカ関係情報を収集し内外のボリビ ア関係者に提供する。

ラテンアメリカ (LAA) 協会、LA関係駐日大 使館・国別組織・団体、海外日系人協会、JIC A, JETRO, JATA, FOODEX, イス パニカ、ラテンアメリカ文化交流協会(AMIG O)、イスパニカ、セルバンテス協会、LA関係各 種学会、日本キヌア研究会、日本ボリビア医療友 好協会、DIFAR, 日本ボリビア人協会。沖縄 ボリヴィア協会、サンファン帰国者の集い ボリ

ビアフェスティバル 2016 実行委員会など。

⑥ 在ボリビア日系人社会との在日ボリビア人社 会との交流促進支援

ボリビア主要都市・移住地の定期訪問、在日ボリ ビア人社会と連携したボリビアからの政府・民間 などの要人来日、日系人・ボリビア人の訪日研修、 への側面支援協力を継続して実施する。

- ⑦ 日本マスコミのボリビア関係取材への協力 ボリビア関係情報の提供を通じて、ボリビアのP Rへの支援協力を働きかける。
- ⑧個別案件への協力支援
- *建機の保守・操縦訓練学校・講座創設への情報 提供など支援協力。
- *在日ボリビア人による日ボ間輸出入ビジネスへ の情報提供など協力支援
- *日本キヌア研究会との連携活動
- *ボリビア新国国際中等高校設立への寄付金拠出 当面はボリビア日系協会連合会と各地日本人会 による計画策定の状況を見守りつつ対応を検討 する。
- *日本人ボリビア移住100周年誌のスペイン語版 『Los japoneses en Bolivia』 (ボリビアに生き る) の日本国内頒布の継続推進

刊行後2年半で現在累計110冊となり、目標の 200冊を目指して、ラテンアメリカ関係学者・研 究者、在日移住帰国者の配偶者・子弟、ボリビア 人留学生・研修生などへのPR頒布を継続する。 *コチャバンバ・身障者孤児救済施設・聖マルテ ィンの家の日本での募金活動へのPR支援協力

以上